

レクリエーション利用者の実践とその可能性
—アイルランドにおける農村アクセス問題への対処から—

京都大学 北島義和

1 目的

農村アクセス問題とは、農村でのレクリエーションを目的に農地に入ってくる人々と、その土地の法的所有者（主に農民）の間に生じる軋轢である。この問題に対しては、これまで西洋社会を中心に、「正義」、「システム」、「対話」、「市場」の観点から政策的対処および社会科学的研究がなされてきた。しかし、実際に現場で活動をおこなっているレクリエーション利用者自身の対処のありようについては、いまだ十分な分析がなされていない。本報告では、アイルランドの山歩きをめぐる農村アクセス問題を事例として、ウォーカーたちがいかなる観点からこれに対処しているかについて考察をおこなうとともに、そこから自然資源のレクリエーション利用をめぐる社会学的研究に新しい視点を提起する。

2 方法

アイルランド北西部の都市 A に基盤を置き、周辺の丘陵地帯で山歩きをおこなっている登山クラブの活動について、一年間の参与観察おこなった。加えて、クラブの内外でアクセスをめぐる事象に関わったことのあるクラブメンバー7人に対してインタビューもおこなった。この丘陵地帯はアイルランドの中でも農村アクセス問題が特に先鋭化し、様々な対処が不首尾に終わっている地域として知られている。

3 結果

調査したクラブのメンバーたちは、アクセスを低地から高地へのアクセスルートと高地を歩き回ることの二種類に分け、前者については農民の許可によるものとする一方、後者に関しては自分たちに歩く権利があると捉えている。彼らは、地元丘陵地帯のアクセスルートについては農民との対話をおこなっているが、それは完全なものではないし、高地については権利があると捉えてその必要を感じていない。しかし、農民によってアクセスがブロックされると、彼らは高地でも歩くことを控える。また、クラブのつくる農民との対話関係は時に排他性が高くなり、公衆のアクセスとは齟齬をきたす事態を招く。しかし同時に、彼らは公衆の利用についても考えており、農民との対話から公衆アクセスを達成するための試みもおこなう。他方、地元丘陵地帯外の山歩きの場合は、彼らは農民との対話の契機をほとんど持たないままアクセスする。このような一見首尾一貫しないクラブの行動は、「農民との良好な関係」という論理によって支えられている。彼らはこの論理のもと、対立が回避され同時にしばしば友好的なやり取りも伴う農民との関係を「あるべき姿」の山歩きの一部と捉え、それを最も重視した対処をおこなっているのだ。つまり彼らの対処は、楽しみをともなった山歩きに関する「理想」の観点からなされていると言える。

4 結論

クラブによるこの「理想」の観点からの農村アクセス問題への対処は、様々な限界を有してはいるものの、本報告の事例地域のように「正義」、「システム」、「対話」、「市場」による対処が困難を抱えた状況において、農民との軋轢を回避してこれまで通りアクセスを達成するためのひとつの作法として機能している。このようなレクリエーションの論理それ自体に内在する可能性は、レクリエーション利用者の実践を固定的に評価してきたこれまでの社会学的研究の視点に一石を投じるものである。